1-2	演題	家族、相談員として経験し、学んだ看取り
	副題	～施設、家族、在宅医との連携～

		法人名	社会福祉法人 藤嶺会
		施設名	特別養護老人ホーム　弥生苑

発表者名（職種）	吹揚　佳子 相談員
共同発表者	佐久間　篤
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市旭区上川井町 1241-1
TEL	045-922-5141
FAX	045-921-5041
メールアドレス	otoiawase@toureikai.jp
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	平成９年５月開設　従来型 本入所：81 名　　短期入所：９名 平均要介護度：4.3（令和５年４月現在） 法人理念「やさしさ、思いやり、ふれあいを大切に、高齢者の豊かな生活を築いていくことを目標にします。」

研究の目的、PR ポイント

本格的に看取り介護に取り組むようになり 23 年、近年では年間 25 ～ 30 名のお客様が当施設で最期を迎えられている。
当苑での平均在所期間は約３年ですが、医療対応も重度化され、医療に関する知識等、ニーズも拡大されている。
そのような中、ガン末期の母の看取りを相談員として働きながら経験し、今だから理解できるたくさんの学びがありました。

取り組んだ課題

1. 在宅での生活を送るための介護者がいないガン末期の母
2. 余命３ヶ月の母を支える一般事務の長女 (家庭あり)、特養職員の私 (独身)
3. ショートステイとしての看取り介護
4. 生活相談員であり、家族である私
5. これまでの生活スタイルと考えてもいなかった特養での生活のギャップ

具体的な取り組み

1. 治療、生活スタイル、パートナー…、母の本心と、終末としての生活の場の選択肢と決断
2. 短期入所利用の中での事業所探し (主治医、訪問看護)
3. 心と身体、喜びの瞬間づくり
4. 居宅と施設のチーム連携
5. 新たな介護、看護技術の習得

活動の成果と評価

1. 在宅支援者と協働できたことで、本人に負担とならない介護を実践することができた
2. もう一度、笑顔や気力を生むことができた
3. チーム連携の目的がはっきり見えた

今後の課題

1. 諦めた終末の場ではなく、その人らしいライフスタイルの終末期
2. 特養待機者としてのロングショートではなく、終末期のためのミドルステイ (1 ～ 3 か月程度)
3. 最期の時を待つ看取り介護ではなく、ご家族とそれぞれの職種が協働して実践するターミナルケア